

米山先生と 和田家の父母 そして兄

神崎正陳
(茅ヶ崎湘南RC)

前編(米山梅吉記念館館報平成24年春号に掲載)に、和田竹造さんの墓参を契機として、Ⅰ墓参にいたる経緯、Ⅱ墓参記、Ⅲ和田家に関する資料、について記した。

この続編では、Ⅳ「秋邨詩鈔」において、米山先生の次兄菊松さんの著した「秋邨詩鈔」という漢詩集を中心に菊松さんの目を通して、和田家の人々そして米山先生との係わりについて可能な限り事実を探ってみた。Ⅴ「高取藩と和田竹造さんの祖先をめぐって」において、前編と関心が重複する嫌いはあるが、高取藩と竹造さんとの接点を空想まで交えて模索してみた。そして、Ⅵ「米山先生の実父母に対する思い」において、米山先生が和田家および和田家の人々について、完璧にと行ってよいほどに口を緘した理由について、間接事実だけに基づいて推測を試みた。

Ⅳ 「秋邨詩鈔」について

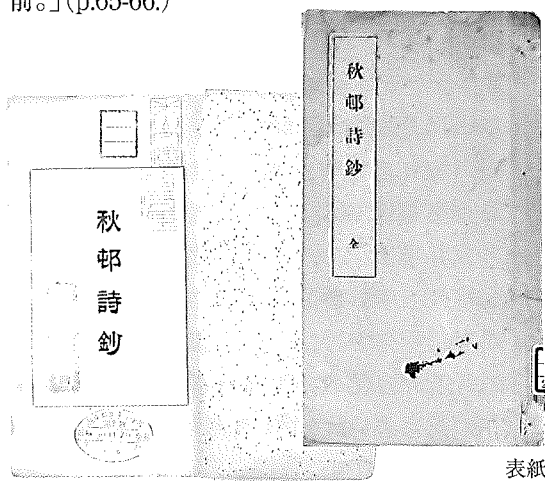
1 佐々木さんが、米山先生の父母兄弟については語るどころ少ないことは前編でも触れたが、長兄栄次郎さんと次兄菊松さんについて、「創意と奉仕」の「支店長時代」の章に、うたさんが亡くなったことに関連して、次のような簡単な記述がある。

「和田のお母さんは、米山さんが大阪の支店長の時、明治四十一年八月二十八日逝去された。折悪く米山さんはチフスで病臥中であつた、三井銀行常務取締役として東京に落ち着いた頃、梅吉少年と米山家の縁を結んだ長兄の栄次郎氏はそ

の後どうしたろう? やはり東京にいて、会社に勤めながら、お母さんと一緒に暮らしていた。教員から中年に転向したのだから、孝心の深い米山さんは黙って見てはいなかったろう。

次兄の菊松氏は教導団を出たことは分かっている。陸軍に勤めたのだろうが、教導団は下士官の養成所だったから、進級に制限がある。精々大尉ぐらいのところで退職したのだろう。東京の郊外で養鶏をやっていたそう。菊松氏は米山さんに似て文藻があつた。菊松氏は秋邨と号して、秋邨詩鈔の一冊を残している。冥福のために次の詩を引用する。

母に陪して先考の墓を展ず
寺門の松樹蒼煙を鎖す 蒿里歌は残りて誰か又
憐む。
如今風樹の感に堪えず。墳塋泣いて對す夕陽の
前。」(p.65-66.)



本扉

表紙

上のうたさんに関する記述は、あまりにも簡単すぎる。それと「病臥中であつた」の次が「。」になっているのは「。」のミスプリントなのか、続く文章の脱落なのか、はっきりしない。栄次郎さん、菊松さんについての記述も、生活状況、家族構成、米山先生との交流等について、触れられていない。菊松さんの漢詩の読み下しを載せていることには、佐々木さんらしい人間味を感じるが、欲を言えばもっと関連のある詩を紹介してもらっても良かったのではないかと愚痴を言いたくなる気持ちにもなる。

秋邨詩鈔については、「追憶集一」の冒頭に、米山先生が中学生の時から生涯を通じての親友であった稲村真里氏の「米山君と余」と題する追憶文の中にも「米山君の仲兄和田菊松氏の秋邨詩鈔の中には「展墓」と「高取城」の詩がある。」という記述がある（「米山君と余」p.144.）。

私は「秋邨詩鈔」がどんな詩集なのか、前から読んでみたいとは思ってはいたが、これに触れた文献を読む機会にも恵まれないまま、手がかりが見つからなかった。今回ふと思いついて、米山梅吉記念館発行の「米山梅吉の登音」を探してみた。「秋邨詩鈔」（記念館所蔵）に高取城有感という詩がある。」という記載を見つけた（p.3.）。記念館に詩集の有無を確認したところ確かに存在し、記念館から借用することを得たので。以下に和田家に係わるとされる詩をご紹介します。

2 A5版の変形とでもいうのだろうか、縦長の和綴じ50丁の詩集で、表紙に「秋邨詩鈔 全」と印刷された紙片が貼付してある。奥付には「大正九年十二月三日印刷 《非賣品》東京府豊多摩郡上戸塚九百五十八番地 著者和田松菊 東京市芝区愛宕下町二丁目二番地 印刷人 荒井徳次郎 東京市芝区愛宕下町二丁目二番地 中外新論社」と記されている。

奥付を見て、大正時代の旧さを想った。菊松氏の住所の冒頭の東京府豊多摩郡という表記も現在の東京都にはない。現在の高田の馬場か西早稲田の辺りらしい。

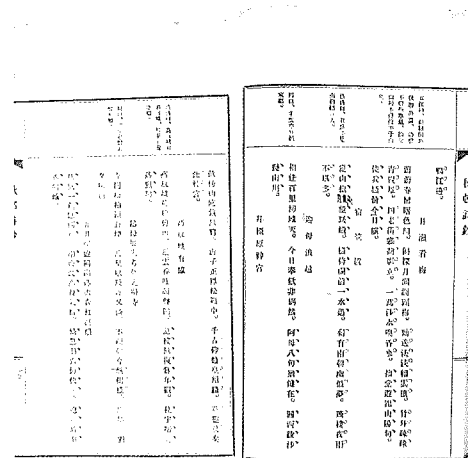
次におやと思ったのが、「著者和田松菊」とあることだった。誤植かと思って本文を見ると著者ご本人が「松菊」と明記しているのである。それなら、佐々木さんの誤りかと調べてみると、巻末の年表（この年表は青山学院で作ったものらしい）には「菊松」となっている。上掲稲村氏も「仲兄和田菊松氏」とはっきり書いている。それでは雅号かと考えてみたが、詩鈔の表題に「秋邨」という立派な雅号が表記されている。雅号を幾つか称することは良くあることだが、著者名となると実名か通称を記すのが常識だろう。となると菊松氏が親のつけた

名前をひっくり返して通称とし、「松（しょう）菊（きく）」と名乗っていたとしか考えられない。

「菊松」という名は、父の竹造、弟の梅吉という名から考えて「キクマツ」と読むのが素直だろう。御一新だ、文明開化だ、と時代の変化は急激であったにしても、土族の身として、菊松さんにもいろいろ思うところがあったに違いない。米山先生も、改名を考えたことがあると佐々木さんが書いている（「奉仕と創意」P.12）。菊という字は訓がないので、「キクマツ」と読むことは重箱読みになる。「菊松」をそのまま音読みにして通称にしようすると、「キクショウ」と読むしかなく、何となく据わりが悪い。しかし、ひっくり返して「松菊」と湯桶読みにすれば、陶淵明の帰去来辞の中の「三徑就荒 松菊猶存」に由来する文学的な雰囲気を持つだけでなく、明治維新の元勳のひとり木戸孝允が号としていたことは、夫人の旧称「幾松」との関係からも有名であったから、格好の良い号ないし通称であったと言えるだろう。いずれにしても菊松さんは自ら松菊「ショウキク或はショウギク」と名乗っていたと思われるので、以下「秋邨詩鈔」にかかわるときは、意を載して松菊さんと記すことにする。

3 「秋邨詩鈔」（以下「詩鈔」という。）中の「展墓」と「高取城」と題する詩。

1) 13丁の表 「高取城有感」と題する詩
「高取城荒餘碧山 亂雲吞吐澗聲聞 譙樓無復當年觀 杜宇啼過落照間」



米山先生の漢詩ならば多少は読んだこともあるからと読み出して見たが、全然歯が立たないので、全文をご紹介します。難しい語が頻出する。例えば第2句の「澗」と記した字の傍は、原文では門構えに月である。漢字源にも見当たらない字なのだが、漢字源によると「澗」は谷川の意であるから、「澗聲聞」は「谷川の水音を聞く」とでも理解することで納得することにした。といった次第で、私になんとか読めるのは、例えば、「杜宇啼過落照間」を「ほととぎす啼きて過ぐ落照の間」とでも読むのかなといった程度である。救いは、「詩鈔」の序を書いている松菊さんの師匠かと思われる小川伍江や同人と思われる詩人たちの評のようなものが欄外に記されていることである。これを読むとなんとか詩意を推測できる。この詩について言えば、角田浩浩という詩人が「高取城君舊藩地、情景共覺凄切。」と記している。「譙樓無復當年觀」という松菊さんの父祖の荒城に対する思いに浩浩が感情移入して、身に染みて悲しさを覚えると評するのが心を打つ。

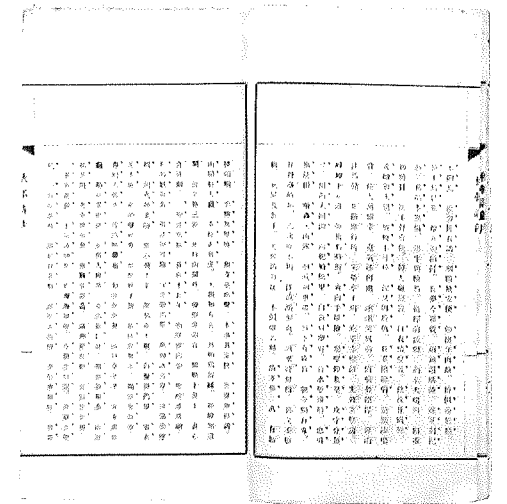
なお、角田（かくだ）浩浩氏は米山先生の親友で、従吾会のメンバーのひとりだが、大正5年に早逝した。先生は、「哭角田浩浩歌客」と題する「与君生在嶽蓮前 誼似陳雷三十年…」（「藍壺文藻」p.516.）という長大な甲詩を献じ、さらに5年後に「角田浩浩歌客を憶ふ」と題する「春は四たび来にけり 春は君ゆきて寂しき 今日の時しる雨に」（同上p.444.）という破調の和歌を詠んでいる。浩浩歌客に対する友情の深さを知ることができるとともに、松菊さんの弟兄間の付き合いも深かったことが思われる。

2) 佐々木さん読み下しの「陪母展先考墓光明寺」と題する詩

「寺門松柏鎖蒼煙 蒿里歌殘誰又憐 不耐如今風樹感 墳塋泣對夕陽前」
「陪母」は母に従うという意、「展墓」は墓に詣でるという意として、「母に従って光明寺の父の墓に詣でる」と訳しては見たが、佐々木さんの訳を紹介した後では様にならないので、詩の訳は避ける。「蒿里歌」は葬式の時に歌う歌、「墳塋（ふんえい）」は祖先の墓の意か。詩の第

4句「墳塋泣對夕陽前」は上掲の浩浩が、「字字悲愴衷情可知」と評しているとおり、夕日を受けて竹造さんの墓前に涙する母と子の情景が彷彿する…。この詩が稲村氏の云う「展墓」だと思う。

4 母うたさんとの関わりを詠んだ詩
「迎母浪越」と題した詩が上掲の2詩の前にある。



「相逢百里柳城天 今日奉歡非偶然 阿母八旬猶健在 關西跋涉幾山川」
「浪越」の意味が分からないが、松菊さんの母つまり米山先生の母うたさんが、80歳（数え年）にして関西跋涉の旅に同行していることを詩っているのであろうか。うたさんは81歳で亡くなっているので、第3句でいう「八旬」が誇張でないとする、亡くなる前の年に関西跋涉をしていたことになる。明治40年の東京から高取を含む関西に旅行をすることは大変な難事だったと思う。上記の「陪母展先考墓光明寺」の詩が実感を伴って迫ってくる感がある。浩浩曰く「孝養亦有頼家郷。」……。

18丁表に「戊申八月失母有感」と題した、母うたさんの死を悼む詩がある。

「藥爐烟斷引愁長 風樹宵宵夢不真 一去幽明途已隔 空思白髮倚門人」

伍江曰く「語次眞率、感愴殊深、不堪多讀。」戊申は明治41年。何も言うことができない。伍江の言のとおりだ。

5 米山先生との関わりを示すと思われる詩。

17丁表に「和梅馨散吏所寄詩韻」と題する詩がある。

「紅塵脱去便清閑 好住駿南雲石寰 江浦
滌澗明似鏡 巍然蓮嶽玉孱顏」

米山先生が中学生の頃「梅(ばい)馨(けい)」と号していたことは知られているので、先生が寄せた詩韻に松菊さんが和したと解することができる。「散吏」は文人墨客の雅号に添えて用いる語。この詩だけから梅馨即米山先生と決めるのは早計かという疑問が残る。

24丁表に「過梅馨散史高輪居」と題する詩がある。

「疎雨漸晴秋盡天 紅楓亂點小樓邊 煙波渺
渺品灣夕 一髮總房來眼前」上の梅馨散史と同人だろうか。「散史」は散吏と同じ。詩意は秋の梅馨散史の高輪の居宅から千葉方面を望んだ、東京湾の叙景詩だと思う。米山先生が高輪に住んだことがあるのか、そうだとすると何時ごろか、いずれも不明。伍江曰く「雨中品海光景寫得如畫。」

37丁裏に「送梅馨散史海外」と題する詩がある。

「朔地如今似比鄰 鐵車千里涉煙津 鴨江
西去多陳迹 憑弔應吟哈爾賓」「想復君為征外客 一春離合入詩魂 歐煙米雨三千里 添得舊鴻新瓜痕」

この詩は梅馨散史の外遊を送る詩だろうと思うが、詩中に鴨江、哈爾賓、歐煙・米雨等の語が出てくることから、鴨緑江、ハルピン、ヨーロッパそしてアメリカを旅したことが分かる。帰国してから贈った詩か。

「創意と奉仕」は「大正2年3月に、米山さんは英国に出張した。…」と簡略に記しているが、「年表」には第3回外遊と記され、大正2年3月15日に出発しシベリア經由英仏米各国へ旅したとしている。「送梅馨散史海外」の訪問地と完全に一致する。同じ37丁の表に、「詠牛」と題する詩があり「葵丑歳旦試筆」と付されている。葵丑は大正2年であるから、梅馨散史が外遊した年と一致することも間接資料になろう。梅馨という同じ雅号を持った

人が実在して、菊松さんに漢詩を寄せ、大正2年に海外旅行をしたという事実が判明すればともかく、上掲の梅馨は米山先生に違いない。その頃は先生は他の雅号を名乗っていたと思うが、松菊さんにとっては、梅馨散吏はいつまでも中学生梅馨散史であったのだろう。

和田の親子に関わる松菊さんの詩はまだまだあるかもしれないが、漢詩に詳しい方の全詩読み下しを期待してこの辺に止める。

V 高取藩と和田竹造さんの祖先をめぐって

前編に記したように、高取藩内で和田竹造さんの血脈を辿ることは不可能に近い。そんなことを考えながら、高取町が発行している「高取町史」を捲っていて妙なことを連想するにいたった。

徳川譜代の植村家政が高取城に入部した時から、高取藩の歴史が始まることになるが、「高取町史」によると「本真院殿御分限帳」という高取藩初期の文献に、禄300石を給されている和田嘉右衛門という藩士の名が載っている。同分限帳には、禄高の高い方から1,000石が2名、同350石が1名、同300石が7名とあるから、高位の藩士であったことが分かる。それから下は13石の藩士まで記載がある(p.187-189.)が、和田姓を名乗る家臣は見当たらない。それ以下の下級藩士については「高取町史」に記載がないから、和田姓の藩士が存したには違いないとしても、前編で触れたように市居嘉雄氏は、高取町内の和田姓を名乗る人たちを調査されたが、高取藩と関係のある人はなかったことを記していられる。ということは国許の藩士たちの中にも和田姓を名乗る人が少なかったということを推測させる。植村家政は家臣を引き具して高取に入部したのだから、高取城主として新しい家臣を雇うとなるとその多くは領内、あるいは大和周辺の人材になる可能性が高い。和田家の先祖は家政入部以来の家臣団に属していた可能性は高いのではないかと考えていくと、上記の和田嘉右衛門が引がかかってくる。

話は無責任に虚構の世界に飛躍する。往年の剣豪作家五味康祐が徳川家光時代の高取藩を舞台にして「上意討ち」という短編を物している。それによると高取藩には、「雲州不伝流『奏者斬り』」を能くし、この技で先をかけられたら刀剣を以てしては防ぐ手はないと柳生宗矩も歎称したほどの使い手」といわれた、和田甚左衛門という400石取りの家臣がいたという設定になっている。和田甚左衛門は有沢勘兵衛という剛直の藩士と肝胆相照らす仲であったが、主命なるが故に已む無く殿中で有沢勘兵衛を上意討ちに果たすことになる。親しい剣の達人同士の間で虚々実々の心理劇が五味流に書かれている。高取藩は、幕末に天誅組に大砲を打ち込み撃退したという武勇伝で有名である。寛永の頃、剣の達人が実在したとして不思議ではない。五味康祐が和田嘉右衛門をモデルにして小説を書いたという事実はあり得ることだと思う。しかし、和田嘉右衛門が竹造さんの祖先であったかどうかということになると、藩主植村家の菩提寺宗泉寺の過去帳をはじめ高級藩士の菩提寺を調べるなどの方法はないことはないが、竹造さんが何代かに亘って江戸詰めの藩士で、高取に縁の薄い状況にあったことは間違いないので、和田家の江戸における菩提寺が判明しない限り、はっきりした結論は出せない可能性が高いと言わざるを得ないだろう。和田嘉右衛門先祖説は、あくまで空想の枠の中で膨らませるしかない。こんなことを言いたくなるのも、資料の不足を嘆く思いによるのだろう。

VI 米山先生の 実父母に対する思い

1 佐々木さんは、「創意と奉仕」の中で、「米山先生は自己を語ることを好まなかった。」(p.133.)と書いている。さらに「ウェスレアン大学に入った米山さんはその後ニューヨーク州のシラキユース大学に転じた。どっちに何年いたか、どういう学問をやったか一切記録がない。ロチェスターでも学んだようだ。(p.35.)」という記述もあるから、かなり徹底していたことは間違いない。それにしても、和田家のこ

と、実父母のことについては、先生滞米中に稲村氏に宛てた手紙の中で「愚父死去致候節は小生幼少にて何の考えも無之…(p.38.)」と書いたこと、その後実母うたさんが明治41年に本郷の栄次郎さんの家で亡くなった時に「臨終まで唯唯感謝の意を繰り返して真に安らかな大往生だったと稲村氏に話した(p.92.)」ことが「創意と奉仕」に記されているだけだ。文筆家、詩人、俳人、歌人であった先生が実家のことに一文、一句、一首も残さなかったことには、首をかしげたくなる。

先生は、養父藤三郎さんが亡くなった時には、

門につどふ 村人の言に もれきこゆ
去りにしわが父の かくれしいさを

という和歌をはじめ5首を、
養母さくさんが亡くなった時には、

八十年まり 美しきもの 良きものを
よるこびゆける 善き人なりし

(藍壺歌稿)

という和歌を、捧げているのである。

この疑問に対する何らかのきっかけを見出せないかという思いから、米山先生が生まれてから明治20年に渡米するまでの間の、実父母と養父母との関わりの流れを追ってみた。

2 年表によると、米山先生が生まれた時うたさんは41歳だった。慶応・明治の頃としては高齢出産といえる。竹造さんが末子梅吉の誕生日も待たずに高取藩士として高取に単身転居した後、うたさんは末っ子を溺愛したのではないだろうか。竹造さんが亡くなった時先生は5歳(満4歳5月)だった。父母と同居の家庭で育っていれば、父親に対する記憶は残るはずだが、上の稲村氏あての手紙で「何の考えも無之」と書いているということは、以来4年近く、同居していなかったことを推測させる。その上、和田系の祖父母が一緒だったということをはのめかすような記録も全く見当たらないので、全くのお母さん子として育ったのだろう。「年表」は明

治8年映雪舎に入学と推定しているから、これより前に三島に移住し、明治12年に納米里に移ったことになる。とすると、三島の母方日比谷家の祖父母との接触は考えられることだが、これも全く記録にあらわれない。密な接触はなかったということであろうか。このような経過を辿ったとすると、明治14年に沼津中学に米山家から通学するようになるまで、つまり生まれてから14年間母の子に対する関係は直接かつ密接な状態が続いたことになるようである。

次に、米山少年は明治16年12月東京に出奔し、明治18年たぶん春頃から明治20年の秋渡米するまでの2年半ほどを、愛宕町でうたさんと一緒に生活した期間がある。そして渡米直前の10月に慌ただしく養子縁組をすませている。

沼津中学に入学した梅吉少年は、長泉の米山家から学校に通った。上記出奔するまでの3年弱である。米山を名乗るようになった梅吉少年は明治28年に帰国するまでの8年間、ポール・ハリスの5年間の愚行と似て非ではあるが、父母祖父母だけではなく近い親族とも全く離れた、孤独な期間を過ごした。

明治29年には著書の出版・結婚・就職と、忙しい人生をスタートさせたが、この年は奇しくもポール・ハリスがシカゴで法律家人生を始めた年であった。

3 人の性格さらには人格といわれるものは、一生を通じて変化することはあっても、大きくは、生まれつき備わっているものと、青年期ごろまでに環境によって形成されるものとは異なるといえるだろう。佐々木さんが「創意と奉仕の一生」と評価した米山先生の人格がどのようにして形成されたのか、父母の血統による生得的なものとはかくとして、生まれてからの環境によって変化し形成された性格は、①渡米するまでの母うたさんの教育と、②沼津中学と米山家での数年間の教育と躰そして、③アメリカ滞在中の環境（詳しくは判明し得ないが本多庸一先生の影響が大きいことは無視できないだろう）。ポールは養子の苦労は知らないが、祖父母

の影響で類い希な人格(或いは性格)を作り上げた。米山先生の人格(或いは性格)は、天性の人格に、幼少年期は母うたさんの、中学の三年弱は養父母の、そしてアメリカ留学中8年間は上記本多庸一先生(以外は名前の特定すらできない)の、影響を受けているはずである。どのように養家と実家に対するけじめを身に着けたのだろうか。多感な年代の八年間をアメリカで縁者なしに過ごしなが、アメリカがぶれにならなかったのは何ゆえか。これらはポール・ハリスの人格あるいは性格形成と比較して論じられて然るべきところである。米山先生についても、その際だった生き様があるだけに、後世は関心を抱かざるを得ないことになるのだろう。

私には、この問題に結論めいたことを論ずる能力に欠ける。先生ご自身が「看雲録」の中で、「人格」と「品格」とを対比して論じていられるので、それを以下に記して終わりたい。「世に人格と云ひ品格と云ふが、人格は天与のもので、稟性であり、而して其の幾分は練磨によりて完成される。人の品格も亦自然に見られるものの如くにして、同じく修養によりて熟達されるものである。此の両者を兼ね備へたものが本多(庸一)先生のやうな人であるが、稀にあつて常でない。人格は暫く特別のものとして、品格は力めて怠らずんば、其の向上完成を期することが出来るのである。」(米山梅吉選集上巻p.317.)

完

完として見たが、未だに納得できない。



養父母金婚の祝い(米山梅吉45歳)

大正2年、第3回外遊(シベリア經由英仏米各国への旅)を終えた頃。養父母の金婚式はこの年の10月である。